Ⅳ－５

里山に対する認識特性とその景観評価について

秋田大学　学生員　　佐藤　素央
秋田大学　正会員　　木村　一裕
秋田大学　正会員　　清水浩志郎

１．はじめに

里山は、「ふるさと」という言葉から連想され、日本人の意識において根元的な意味あいを持つ農山村であり、日本人のアイデンティティとも言えよう。また、自然と人間との共存というテーマが世界的に大きな意味合いを持つようになり、理想的な形態ともいえる里山が注目されるようになってきた。近年、都市化がますます進み、里山的な農山村は加速度的に失われる中で、里山、里山景観の保護についての取り組みが行われはじめている。

一方、里山景観に注目したとき、農山村に暮らす人々にとって、景観資源としての意識が低く、景観への配慮はあまりなされてはいないようである。人工的建造物の色、材質などは里山の景観評価に相当影響すると考えられるが、無頓着に施工されているように見受けられる。

本研究では、里山のもつ、心情的、意味的な認識の特性を把握し、里山の景観評価への応用を考える。

２．研究の概要

本研究では、里山というものの認識特性をつかむために、里山に関わりの深い言語的イメージを把握し、里山のイメージを景観論的手法により明らかにすることによって、里山の全体像をとらえる。

ついで、里山的イメージの創出が修景によって可能であることを、CGを使用した景観イメージ調査によって明らかにする。

なお、研究に用いた里山写真等は、秋田県の農山村地域からサンプリングし、CGの作成には Adobe PhotoShop 4.0J を用いた。

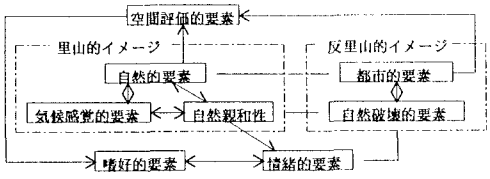
３．里山の言語的イメージ

里山の言語的イメージを明らかにするために、言語連想法によるアンケート調査の後、KJ法による分類を行った。

表-1　言語イメージ調査概要

調査方法	言語連想法
被験者	秋田大学の学生と父兄　63名
質問項目	①『里山』という言葉から連想する良いイメージ、モノ、人の動き ②『失われゆく里山』という言葉から連想する良いイメージ、モノ、人の動き

図-1　KJ法による分類の概要



里山を構成する要素を分類すると、自然的要素を全体の背景として、気候感覚的要素、自然親和性と互いに深く結びついている。また自然親和性から情緒的要素への大きな因果関係がみられ、逆に自然破壊を伴う利便性や都市的要素は里山感ともいえる情緒的要素を損なうものであることがわかる。

４．里山の景観的イメージ

里山の景観的イメージを明らかにするために、学生25名によるSD調査の後、因子分析を行った。写真の選定にあたっては、里山風景において視点位置が違うものを４種類、川のある里山景観、舗装道路のある景観、自然の風景、街路景観の計8パターンを選択しバラエティを持たせることとした。

なお、形容詞対については、里山の言語的イメージ調査で得られた結果を基にしている。

表-2　景観イメージ調査用形容詞対

(1)自然とのふれあいの要素（自然親和性）		
生き物の気配を感じる	←→	生き物の気配を感じない
(2)情緒的要素		
親しみやすい	←→	親しみにくい
人の温かみを感じる	←→	人の温かみを感じない
ほのぼのとした	←→	きすぎすとした
郷愁感のある	←→	郷愁感のない
活気のある	←→	活気のない
素朴な	←→	派手な
ゆったりした	←→	はりつめた
(3)空間評価的要素		
明るい	←→	暗い
落ち着いた	←→	にぎやかな
調和のとれた	←→	無秩序な
(4)気候感覚的要素		
暖かい	←→	冷たい
(5)嗜好的要素		
好き	←→	きらい
美しい	←→	醜い
(6)その他一般的要素		
柔らかい	←→	固い
清潔な	←→	汚い
豊かな	←→	貧しい
無駄のある	←→	無駄のない

視点位置の異なる4種類の写真を比較したところ、有意な変化はほとんど見られなかったが、同レベルの場合において郷愁性が大きく感じられるようであった。川と道において比較した場合、単純集計ではイメージが比較的似ていたが、川のある景観では景観調和性の因子が、道のある景観では生活感が感じられるようである。また、自然景観ではやや景観調和性があらわれ、都市景観では快活性があらわれた。

表-3　提示写真のバラエティ

視点の位置	川と道	自然と都市
写真1-1　やや俯瞰 写真1-2　同レベル 写真1-3　やや見上げ 写真1-4　俯瞰	写真1-5　川が存在 写真1-6　道が存在	写真1-7　自然風景 写真1-8　街路景観

街の景観以外のすべてに「ゆったりとした」「素朴な」「落ち着いた」「ほのぼのとした」という形容詞に有意な因子がみられ、これを情緒的時間減速性と解釈した。

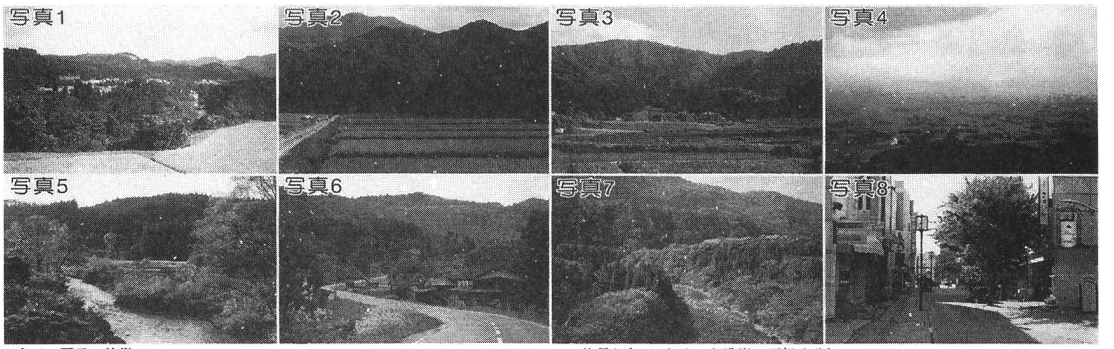


表-4　因子の特徴

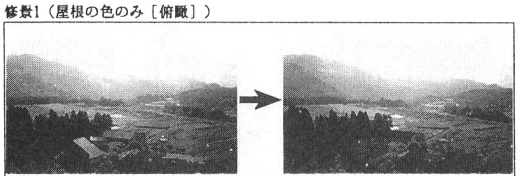
	因子1	因子2
写真 1	自然親和性	情緒的時間減速性
写真 2	情緒的時間減速性	郷愁性
写真 3	景観調和性	情緒的時間減速性
写真 4	生活感	情緒的時間減速性
写真 5	景観親和性	情緒的時間減速性
写真 6	生活感	情緒的時間減速性
写真 7	情緒的時間減速性	弱い景観調和性
写真 8	生活感	快活性

このことから、情緒的時間減速性が、里山的な景観においての特徴といえよう。

5．里山的景観イメージの具体的評価

CGにより作成した修景画像6パターンにおける里山的イメージへの変化を、学生25名による調査によって明らかにした。それぞれの写真に含まれる構成要素の一部に修景を施すことによって、景観イメージは次のように変化した。

修景1（屋根の色のみ［俯瞰］）



屋根の明るさを暗くしたことにより全体的に暗めの写真となったことで、イメージとして「暗さ」「活気のなさ」がでてきた。また、屋根の色が周囲にとけ込む色になったことから「調和がとれてきた」と感じているようである。これによって、更に「素朴さ」「落ち着き」といった、里山らしさが出てきたと考えられる。また、わずかだが「郷愁感」もでてきた。

修景2（小学校屋根、壁の色）

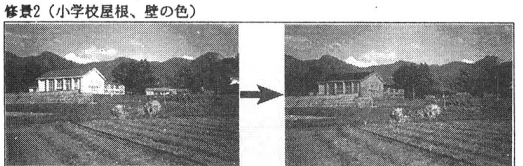
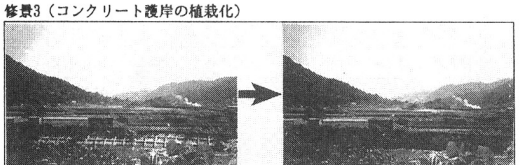


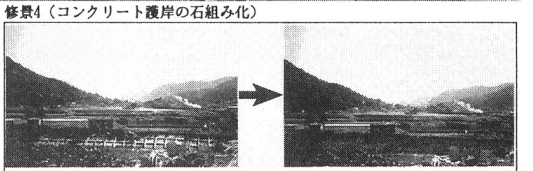
写真2-1→2-2と同様であるが、更に強調されている。また、「ゆったりとした」イメージがあらわれた。里山感の増加と考えられよう。

修景3（コンクリート護岸の植栽化）



「活気感」「清潔さ」の変化はなかったが、他のイメージほぼすべてにおいて大きくプラスに変化した。特に「ほのぼの感」「生き物の気配」「柔らかさ」「ゆったり感」「暖かさ」といった里山の楽しさともいえるイメージの変化が顕著であると考えられる
わずかながら「暗さ」のイメージが出てきたが、前の例から考えると暗くても好印象なイメージが里山景観特有の要素の一つかもしれない。

修景4（コンクリート護岸の石組み化）



ほとんどのイメージでプラスであるが、写真4-1→4-2と比較すると、変化が少ない。
ここでも、「暗さ」の増加とともに「素朴さ」「落ち着き」といったイメージがあらわれている。
「親しみやすさ」「暖かさ」の増加が見られることから、コンクリート護岸は特に「親しみにくさ」「冷たさ」を増加させる要素であると考えられる。

修景5（民家の屋根、壁素材の自然素材化）

このケースでも、写真4-1→4-2（コンクリート護岸の植栽化）とほとんど同様な変化が見られた、このことから、民家の屋根、壁を自然のものにすることは、コンクリート護岸を植栽化することと同様な意味合いがあると考えられよう。
ここでも、「活気のなさ」「暗さ」の増加と引き替えに、「素朴さ」「落ち着き」が出てきている。

修景6（民家の屋根、壁素材の自然素材化＋電線、電柱、ガードレールの削除）

写真5-1→5-2の変化を更に強調したものとなったが、「暗さ」が減少している。これは、電線、電柱、ガードレールがなくなったことによる、空間の解放感から創出されていると考えられる。特に、ガードレールの明るさがなくなったのも関わらず「明るさ」が増えていることに注目したい。

6．終わりに

本研究では、里山のイメージを、言語的手法によるアプローチと景観的手法によるアプローチから求めたが、言語的手法、景観的手法ともに必要十分条件の関係があらわれた。

このことから、里山とは、自然と人間とが共存関係にある様子の伝わる農山村であることが、言語的手法だけでなく、景観的手法からも裏付けられることとなった。

さらに修景による手法より景観資源としての里山を守り、また創出することも可能であると考えられよう。